

アドリエヌ・リッチのフェミニスト批評

今 泉 容 子

アドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich) は1980年代アメリカのラディカル・フェミニスト。それに詩人でもある。いや、むしろ詩人としてのリッチのほうがよく目立っている。なにしろ学生時代の1950年に、大御所 W. H. オーデン選考によるイェール若手詩人賞 (Yale Younger Poets Award) を授賞するほどの腕の持ち主なのだから。彼女の詩への入魂は並みたいていのものではない。しかし、リッチは自分の詩芸術を、フェミニスト思想につらぬかれた自分の散文から切り離して考えてはいない。詩人は「世界や共同体」と結びついているべきだし「政治的、道徳的な問題」に向かいあうべきだ、¹⁾「すべての芸術は政治的なものだ」²⁾と彼女は断言する。「詩」が「社会の変革」にかかわるものなら、リッチの詩と批評は同じ意味をもつことになる。リッチ自身、「わたしはしばしばスポークスマンの役割を課せられていることに気づく詩人だ」³⁾といている。

リッチが詩人と批評家をごく自然にこなしているため、アメリカのフェミニスト文学批評家の代表のひとり、サンドラ・ギルバート (Sandra Gilbert) はリッチを高く評価する。批評家だけ (「左脳さん」とギルバートは呼んでいる)、詩人だけ (「右脳さん」) が多いなかで、両方こなせることはひとつの完全体のすがただそうだ。⁴⁾

右脳のほうも興味深いが、今回はリッチの左脳を開いて見せてもらうことにしたい。フェミニスト批評家としての強い主張がストレートに表現されているリッチの散文は、アメリカでは根強い人気があり、イギリスでも歓迎されて読まれている。リッチの批評には、フェミニストとして独特な点がいくつか提示されている。

リッチの批評方法とポスト／ポスト構造主義

リッチの批評方法は、緻密なリサーチ (たとえば産婆から現代の産婦人科にいたる出産の医学史研究、エミリオ・ディキンソンや『ジェーン・エア』やエリザベス・ビジョップなどの文学研究) と個人的な経験が混じり合ったなかか

ら理論や主張が引き出されるという、アメリカ流フェミニズムの典型的な方法である。フランス流フェミニズムとはまったく無縁な方法であり、リッチがエクリチュール・フェミニンという考えに興味を示すようすもなければ、精神分析を取り入れるようすもない。

リッチの批評には、語る「わたし」がつねに存在している。「このような本を書くには、おおいに自伝的口調になり、《わたし》を連発してこそ書ける、と最初から思えてならなかった」とリッチ自身、告白する。⁵⁾「このような本」というのは、このときたまたま書いていた『女から生まれて——経験と制度としての母性』(*Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*) だが、リッチの書くすべての著作にあてはまる。

こうした個人的経験談を理論へと昇華させるところは、リッチの特徴である。それが、フェミニスト運動には必要だと、彼女は信じている。ひとりの個人の経験談はただそれを語るだけなら、ひとつのポツリとした事例でおわってしまうのだが、そこから理論をつくり出す——普遍的な原理をひき出す——ことによって、その個人の経験はもっと多くのほかの女性たちのものにもなっていく。この普遍化、理論化が、女性たちのあいだのきずなとなる。

Theory essentially means thinking, reflecting on, what has happened to us and drawing some kind of general principle from that . . . Unfortunately, when we explore our concrete experiences without theory-making, we are left with isolated instances, feelings of victimization, therapy insights, perhaps, but no sense of how these experiences belong to a larger whole, or how we can move out from them not just as individuals but with large members of other women.⁶⁾

リッチは自分の経験を読者にさらけ出す。『女から生まれて』のことを「聖アドリエヌの告白」(「聖オーガスティンの告白」のもじり)と呼んだ批評家もいるほどだ。⁷⁾ たしかにリッチの「わたし」は、個人的な経験、あつときどうして怒りどうして悲しんだのか、そうした経験や感情を読者にぶつけてくる。リッチという作者の姿はいやでも見えてくるし、彼女の匂いはかぎたくなくても漂ってくる。リッチの強い体臭にしりごみしては、彼女のテキストに入っていくことはできない。しかし彼女の体臭に鼻をつまんで、顔をそむけた批評家たちも多く、たとえば『女から生まれて』の最初のふたつの書評は、いずれもリッチをこきおろした。そのせいでリッチの本は書店から発注されな

くなり、テレビのインタビュー番組はキャンセルされたそうだ。⁸⁾

はっきりと存在する「作者」、そして個人の「経験」。作者、経験、これらの言葉はどちらも、ポスト構造主義によって排斥された言葉である。ほかにアイデンティティ、作品、自己、意味、表現、働きなどの言葉も、ポスト構造主義によってナイーブとされ抹殺されたものだ。こうした状況を端的に要約しているのは、スーザン・スタンフォード・フリードマン(Susan Stanford Friedman)の論文“Post/Poststructuralist Feminist Criticism: The Politics of Recuperation and Negotiation”だが、フリードマンは「作者」がいま復活をはたしかけていることを指摘する。⁹⁾「いま」というのは、「ポスト・ポスト構造主義」のこの時代のことだ。その主義の特徴は、ポスト構造主義がかつて捨て去ったものを、もういちど復活させて批評方法に取り込もうとすることである。ポスト構造主義とそれ以外のヒューマニスティックな非ポスト構造主義を、歩み寄せ融合させることといってもいい。¹⁰⁾

フリードマンは言及していないが、ニューヒストリシズム(New Historicism)とフェミニズムをつなぐもののひとつは、「自己」や「わたし」を強調する批評態度だろう。ニューヒストリシズムにおける歴史のとらえたかたには、フェミニズムにおける「わたし」の重視が反響している。たとえば、ニューヒストリシズムについて語るポール・アームストロング(Paul B. Armstrong)は、歴史をこう定義する。

History is not simply a determinate object to be reflected more or less without distortion by the mirroring mind of the critic. History is always history for an interpreter whose presuppositions and interests will shape his or her understanding of it, even as the resistances it poses to interpretation give body to the otherness of the past and suggest its irreducibility to any particular construal of it.¹¹⁾

歴史はひとりひとりの解釈者にとって、ちがった歴史になる。解釈する個人の「前提や興味」が介入してくる。つまり「わたし」が介入してくるのだ。抹殺された「わたし」がいまいちどクローズアップされていることに、アメリカ流フェミニズムの自伝的な方法論——たとえば、「聖アドリエヌの告白」とイヤミっぽく呼ばれるようなアドリエヌ・リッチの「自己」(女性としての自己)にこだわる続ける方法論——がどれくらい力を貸したか、探ってみるとおもしろいだろう。¹²⁾「作者」とか「経験」とか「自己」の復活を、ひとえにフェミ

ニズムの力に帰そうとするのはおおまかすぎるが、やはり貢献は無視できないと思う。とうぜんリッチはその貢献者のひとりだ。

リッチと男性批評家

作者としてのリッチは、彼女自身によってくり返しくり返し「白人の、中産階級の、ユダヤ人の、レズビアン、フェミニスト」と定義されている。¹³⁾ 論文によってこのうちの「白人」と「女性」が強調されたり、¹⁴⁾ 「ユダヤ人」と「女性」が強調されたりするが、¹⁵⁾ いずれにしてもそこには「女」というアンデンティティが極度にはっきりと提示される。さらに限定すると「同性愛」の「女」、つまり「レスビアン」というアイデンティティが。リッチは「レスビアンとしてのわたしのアイデンティティ」をつねに口にするだけでなく、読者にそのことに気づかないふりをしてもらいたくない、とはっきりことわっているほどだ。¹⁶⁾ (リッチにとって重要なレスビアンの意味については、のちに述べたい。) そうした立場からしか考えられないし、しゃべれないのがリッチの「わたし」である。

その作者が語りかける聞き手あるいは読者もまた、はっきりと想定されている。いちいち例をあげるまでもなく、彼女の書くものはほぼすべてにわたって、「あなたがた女性」がターゲットになっている。リッチの批評のいくつかは、女性の集会(女子大学の、女性教師の、母親の集会)での講演が活字になったものであり、それらの批評にはとうぜん、「わたし(女)」と「あなたがた(女)」と「わたしたち(女)」という三つの代名詞が満ちあふれることになる。¹⁷⁾ ここにひとつ問題が出てくる。男性はリッチの視野には入っていないのか、という問題が。男性は排除されてしまっているのか。

男性とフェミニスト批評のかかわりは、複雑で微妙だ。いかにさまざまな意見が戦わされているかは、そのたぐいの論文を集めた『フェミニズムにおける男性』(*Men in Feminism*)を手にとってみるだけでわかる。出版されてから少し時がたってしまった論文集だが(1987年出版)、いまでも重要度の高い著作であることにかわりない。男性とフェミニズムの関係はまだ未解決だし、その著作に掲載されている諸論文はまだじゅうぶん有効なのだ。

その論文集の巻頭に載せられたスティーヴン・ヒース(Stephen Heath)の「男性のフェミニズム」("Male Feminism")は、こんな書き出しになっている。「男性とフェミニズムの関係は不可能な関係である。」ヒースは理由を述べる。「女性がフェミニズムの主体であり、その主唱者であり、創始者であり、

勢力なのである。」それにたいして、男性はフェミニスト批評によって分析される側であり、打ち破られるべき悪しき父権制をつくった張本人なのだ。「男性は客体であり、分析の一部であり、変革されるべき構造の操作人であり、父権制の代表者かつ実行者である。」分析され解剖される側の男性が、「フェミニズムのなかでも主体になりたいという欲望」¹⁸⁾をもつところから、問題が生じる。ある男性批評家たちは、ジャネット・トッド (Janes Todd) の的を得た比喩的表現によると、「まるで更衣室で《男装から女装へ》服を着がえるくらいにしか考えずに、フェミニスト・ディスコースをおもうままにしたり、一般にフェミニストの主題とされているものについて書いたりしていた。」¹⁹⁾ ヒースはこうした気軽に女装する男性たちとは異なり、もともと女性のものであったフェミニズムと、男性としての自分との関係を、真剣に考えている。いろいろな可能性をさぐったあとに、彼が到達するのは、「わたしは彼女たちの場所にはいないし、いるふりをすることもできない」²⁰⁾ という認識であり、男性とフェミニズムとの結びつきは「不可能」だという出発点なのである。そしてふたたび可能性をさぐる試みがはじまる。

男性とフェミニズムをめぐるいろいろな議論は、リッチには無縁のようだ。男性がフェミニズムの主体になり得るといふ発想はないし、そもそも男性はリッチのフェミニスト構想の射程距離のなかに入ってもこない。いや、入ってこないといいきってしまえば、語弊をまぬくかもしれない。1976年までのリッチは、女性の聞き手と同じように男性の聞き手も想定していたのだから。男性にもフェミニズムの構図のなかに入ってもらいたいという希望は、1972年の「反フェミニストの女性」(“The Antifeminist Woman”)や1976年の『女から生まれて』にうかがえる。前者の論文では、フェミニズムの行為のなかに女性だけでなく男性も取り入れられているのである。

I believe that feminism must imply an imaginative identification with all women (and with the ghostly woman in all men) and that the feminist must, because she can, extend this act of the imagination as far as possible.²¹⁾

フェミニズムにとって女性どうしの結合が重要だ、と述べているこの一節。女性は想像力をはたらかせて、ほかの女性と本質的に同一であることを認識し、結びつきを強めていく必要があるという。ほかの女性と結びつくだけでなく、「すべての男性のなかにいる影の女性」とも結びつくことがうながされてい

る。男性がもっている「影の女性」とはなんのことだろう。男性には女性を理解できる部分があって、そうした部分を契機に女性と男性とが手を取り合ってフェミニズムを推進していく、という主旨なのか？ 判然とはしないが、「すべての男性」をフェミニズムの構図のなかに入れている、あるいは入れようとしている一節である。

ところが、この「すべての男性のなかにいる影の女性」は1978年になるとあっさり捨てられてしまうのである。「すべての男性のなかに《影の女性》がほんとうにいるのか？ そもそもこれによって、わたしはなにをいいたかったのだろうか」²²⁾と自問する1978年のリッチ。

1978年という年は、これまで発表してきた論文のうち、「女性の意識をあきららかにする」²³⁾の役に立つものを選んで、一冊の本にする仕事にとりかかった年である。論文集は『嘘、秘密、そして沈黙——1966年から1978年の散文選集』(*On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose 1966-1978*)として、翌年出版された。この選集をつくるさい、彼女は自己との対面を経験することになったというが、自己批判や自己賛同をとおして、²⁴⁾リッチの立場はますますはつきりしてくる。そして、男性はフェミニズムの領域からはずされることになる。男性にわかってもらおうと努力することは、むしろ自分の主張に手かせ足かせをはめるものだ、という反省すらなされる。

男性にもわかってもらいたい、という思いゆえに、リッチは言葉使いを男性にとって無害なものにした事実をふりかえっている。

As long as I wrote in the hope of “reaching” men, I was setting bounds on my own mind, holding back; trying to make the subversive sound unthreatening, the unthinkable reassuring. And so I used terms like “androgynous,” “bisexual,” or “human liberation” which, almost as soon as I wrote them, rang flat and ineffectual to me, and which *were* effective only as checks on my own thought.²⁵⁾

男性にとって無害な言葉——「アンドロギュノス」、「バイセクシュアル」、「人間の解放」。リッチはこれらの言葉がなぜ自分の思想の妨害になるのか、説明していない。しかしそれらの言葉が響かせている男性と女性の上下関係と伝統的な（つまり父権的な）価値観は、だれの耳にも聞こえてくる。たとえばアンドロギュノスというのは、男性的なものとの女性的なものとの合体だという

が、その正体はなにか。男性的なもの／女性的なものは、あの悪名高いバイナリ・オポジション（二項対立）の代表項である。男性／女性、主体／客体、自己／他者、光／闇、強／弱、表／裏、正／副、上／下、右／左、公／私、正常／異常、健康／病気など、このリストは無限に続く。一項目が男性的なもので、二項目が女性的なものだ。男性が主であり、健康な光り輝く社会をつくる。そこからみ出したものが女性である。乳房と尻にシンボル化された不可解な闇のモンスター。そうした女性的なものを、男性という主体にあえてくつつけたものが、アンドロギュノスである。主体はあくまでも男性のまま。その証拠にアンドロジニは「彼」と呼ばれる。ほんらい男性が考え出した男とか女という概念をいくらかねくりまわしても、結果は男性の実しか結ばない。アンドロギュノスは、男性的な規範の持ち主にとって有効な概念なのだ。

いまでこそリッチは、こうした言葉を用いたことを後悔している。しかし言葉の選択をおこなったのは彼女自身なのだから、やはり当時は、女性と男性をできればともにフェミニズムの構図に入れたいという願望をいただいていたのだろう。

男性への期待は、1976年に出された『女から生まれて』にもチラとあらわれた。「自分の息子をどうしたいか」という問題について、リッチは父親としての男性の協力を期待していた。おとなの男性が男児を、非＝父権的なあたらしい人間のヴィジョンをもてるように育てること、つまり従来のような女性観（滋養や慰安を与えてくれるものとしてだけの女性）をもたないように育てることを期待していた。こうした男性による男児の育児がひろがっていけば、父権的社会が変わっていくと、リッチは考えていたようだ。

We could wish that there were more fathers—not one, but many—to whom they could also be sons, fathers with the sensitivity and commitment to help them into a manhood in which they would not perceive women as the sole sources of nourishment and solace. These fathers barely exist as yet; one exceptional individual here and there is a sign of hope, but still only a personal solution Until men are ready to share the responsibilities of full-time, universal child-care as a social priority, their sons and ours will be without any coherent vision of what nonpatriarchal manhood might be.²⁶¹

そのような男児に非父権的なヴィジョンを与えてやれるような父親たちが「いまのところはまだほとんど存在しない」と、リッチは述べた。「いまのところはまだ」というのは、将来は増えるだろうと期待していた証拠だ。それに、ひとりでもふたりでも存在していることには「希望」があるとはっきりいつていた。

このような男性への期待は、1978年以降どこへ行ってしまったのだろう。リッチは1979年から1985年までに書いた論文を、さきに出版した選集と同じ要領で一冊の本にまとめて、1986年に出している。このなかには、彼女がかつては男性に遠慮して口にしなかったキーワードが頻出する。そのキーワードをタイトルに含んだ論文まで登場する。「強制的異性愛とレズビアン的存在」(“Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence”)である。「レズビアン」、この言葉こそリッチのフェミニズムの中心であり、あたらしい人間のヴィジョンを約束するものなのだ。

レズビアン

「正常な」異性のあいだの性愛、それにたいして「変で」「気味悪い」女性どうしの性愛。²⁷⁾ こうした「常識」をくつがえす議論が、論文「強制的異性愛とレズビアン的存在」のなかで展開される。リッチがまずなによりも問題にしたがっているのは、「強制的異性愛」(compulsory heterosexuality)である。異性愛(heterosexuality)が女性たちに強制的(compulsory)に押しつけられている。男性たちがつくり出した神話を、女性たちに洗脳的に信じこませることによって。その神話は、女は生まれつき(生物学的にまた神秘的に)異性に引きつけられ、異性を愛するというものだ。女性たちは子どものころからその神話を頭のなかにたたき込まれ、神話どおり「正常な」愛をまっとうしようとする。レズビアンは「病気と分類され」たり「例外的として扱われ」たりしてきた、とリッチは指摘する。²⁸⁾ そうした「マージナルな、もしくはあまり《自然》ではない現象」という烙印をおされたうえで、「たんなる〈性的な好み〉」²⁹⁾としてはき捨てられるのが、オチだという。

しかし性的な好みということ言えば、異性愛こそほんらい「女性にとって《好み》あるいは《選択》」³⁰⁾であるはずなのだ、とリッチは力説する。その好みであるはずの異性愛が、「慣習=制度」(an institution)として女性たちに押しつけられているところに、問題があることをリッチは指摘する。女性は

男性を愛するのがあたりまえなのだ、女性は男性と結合（結婚＋セックス）するのがあたりまえなのだ、という異性愛の制度。その制度のうえに現在の社会は成り立っている。しかしその前提があたらしい考えに場をゆずったら、いまとはずいぶんちがう社会が出現してくるだろう、そうしたあたらしい社会を出現させようじゃないか、とリッチは提案する。

あたらしい社会の前提となる考え、それをリッチは「レズビアン的存在」(lesbian existence) と「レズビアンにつながる存在」(lesbian continuum) というふたつの言葉で説明している。レズビアンがふたつに分けられているわけだが、ふたつはかなり異なったものである。まず「レズビアン的存在」、これは「エロ的にも感情的にも、選択する第一の相手を女性にするような女性」⁸¹⁾ のことであり、「ほかの女性と意識的にセックスをしてきたか、セックスを望んできた女性」⁸²⁾ のことであるという。リッチはそうした女性をこのうえなく賞賛して、彼女のなかに理想郷を思い描いている。

もうひとつの「レズビアンにつながる存在」は、結合がセックスによらずに、「女性たちのあいだの根源的な情熱のいろいろなかたちのもっと多く」による場合だ。「情念のいろいろなかたち」とは、たとえば、「ゆたかな内面的生活を共有したり、男性の暴虐にたいして団結したり、実用的政治的な援助を与え合ったり」⁸³⁾ することだという。こうした「女性ならではの経験」⁸⁴⁾ のさまざまなかたちを、レズビアンの理想郷の構図のなかに入れようとしたわけだ。

しかし、この「レズビアンにつながる存在」という概念には問題がある。女性ならだれでも「レズビアンにつながる存在」になってしまうからだ。「女性ならではの経験」という概念は、あまりに漠然としすぎている。「ゆたかな内面的生活を共有する」ことは、男性だってやれることだし、なぜそれが女性特有のものとされるのだろうか。女性特有なものとか、女性性といった概念は、うさんくさい。女性性とはなにかという議論は、論じる者しだいで、どんな方向にも引っぱっていくことができるのだ。だいいち、「女性ならではの」という概念のもとに、女性ひとりひとりの個別性を消し去って一般化してしまうことは、個体差や多様性を重んじるはずのフェミニストの論法にはんしている。はっきりいって、リッチのフェミニスト批評は、一般化の産物だ。彼女はたしかに自分自身の固有の経験から出発し、それを観察分析する。しかしそれを理論に結晶させるとき、自分の経験がほかの多くの女性たちにもとうぜん当てはまるのだと信じきって、大胆な一般化を展開するのである。ここからリッチの

独断的な、有無をいわせない口調が生まれる。女の自分が経験したのだから、これは女たち全体の経験なのだ、という口調が。

ここはゆずって、リッチのレズビアン用語を受け入れるとしよう。女性は「レズビানের存在」か「レズビアンにつながる存在」か、どちらかに分類されるわけだ。女性どうしてセックスするかしないかが、境界線になっている。「レズビানের存在」というのは実態がはっきりしているが、そのほかの女性たち全員につけられる呼称「レズビアンにつながる存在」は、いまひとつ、ピンとこない。多くの女性たちが、なぜ「レズビアン」と呼ばれなければならないのか。なぜそこまで、リッチは「レズビアン」という語にこだわるのか。

そのこだわりは、ひとつには、「レズビアン」という語をポジティブな語に再生したい、というリッチの思いゆえだろう。自分自身がレズビアンであるリッチは、人々の侮蔑と懐疑できたならしくなった「レズビアニズ」ムという呼びかた（そこには「診療所的な、限定された響き」⁸⁵⁾つまり治療を必要とする精神倒錯者という響きがある）を返上して、あたらしい呼びかたを流通させることによって活性化をはかろうとしたのだろう。

「レズビアンにつながる存在」は、ほんとうのレズビアンではない女性たちだ。いってみれば、フツウの女性たちだ。彼女たちにたいして、ほんとうのレズビアンであるリッチは警告を発する。それは、とうぜんすぎる図式かもしれない。「強制的異性愛とレズビানের存在」という論文はそもそも、「レズビアンにつながる存在」であるフツウの女性が真のレズビアンに目覚めてくれることを願って書かれた、といってもいい。リッチ自身、「レズビアンにつながる存在」にたいする警告の気持ちは、論文が出版されたあとさらに強まったことを、出版の一年後、三人の女性にあてた手紙に書いている。「レズビアンにつながる存在にもっと警告のニュアンスを含ませたい」⁸⁶⁾と。

リッチが女性たちに与えた警告は、ひとことでいえば、「強制的異性愛」という男性がつくり出したふたつのウソにしばられるな、ということである。女性は社会的・経済的に男性を必要とするのだ、というウソ。それから、女性が女性を選ぶのは男性への憎悪が原因だというウソ。最初の点は「ウソ」だと証明されたし、もはや「ウソ」などという言葉もいらなくなっている。多くの女性たちが、男性たちに混じって社会的地位と収入を得ているからだ。彼女たちは男性を社会的・経済的に必要としない。問題になるのは、二番目のウソだろう。またもやリッチの独断的な論法が展開されるからだ。男性に虐待された女性が、あるいは男嫌いな女性が、レズビアンになるのだという話は、文学にも

映画にもしばしばあらわれるが、それはウソだ。そんな理由で女性がレズビアンになるのではない、とリッチはいいきる。ほんとうの理由を、彼女はこう分析する——「健全な女性なら、男性に支配された文化がもつ女嫌いや、《正常》とされる男性のセクシュアリティがとるいくつかのかたちに出会って、いろいろ感じるだろうが、なかでも男性にたいする深い懐疑や警戒やとうぜん感じるべきパラノイアを感じるだろう。」³⁷⁾ 女性が男性にたいしていただく懐疑を率直に発露させれば、女性はレズビアンになるのがとうぜんだ、とリッチは考えている。ここはいろいろな議論がわくところだろう。リッチは「女嫌い」や「女性恐怖」の文化——たとえば魔女狩り、クリトリス切除、レイプ、職場での女差別、ただ働きの主婦、妻あるいは娘を所有物とみなす男——に接しながら、まだ男性にニコニコするなんて、健全な女性にはできないことだ、という。ただ強制的異性愛の神話やウソにまどわされるから、女性たちはほんとうの「レズビアンの存在」になれずに、「ダブル・ライフ」をよぎなくされるのだ、とリッチの主張は続く。「ダブル・ライフ」とは、異性愛が正常だと教えこまれた女性が、いっぽうでは男性に結びつくが、たほう深い情念のレベルで、同性の女性に引かれる二重の人生のことだという。³⁸⁾

男性との関係を断って同性の女性と結びついてくれ、というのが、異性愛の女性たちにたいするリッチの心の叫びである。しかし彼女は声をやわらげ、異性愛のフェミニストたちにひかえめに懇願する——「女性の力を消し去ろうとする政治的の制度としての異性愛を検討すること」³⁹⁾ を、「異性中心主義を問うことなしにフェミニストの視野にたつて読んだり、書いたり、教えたりすることはできない、とすこしでも感じることに」⁴⁰⁾ を、「異性愛の経験を批判的に、敵対心をもって考察すること」⁴¹⁾ を。

それではリッチは、女性が男性と交わるのをぜったいみとめようとししないのか。彼女自身、この問いを口にしている。しかし答えようとはしない、自分の議論に「そぐわない問いだ」⁴²⁾ として。それよりも、女性がみずから選択をしないで、男性によって決められてきた異性愛の流れに身をまかせてしまっていることが問題なのだ、という方向へ議論をもっていつている。またもや男性は、議論のなかに入るのを妨げられた。しかしリッチが男性を100パーセント排除したともいいきれない。「そぐわない」として横へ押しやられはしたが、まだ判決はいいわたされていない。

リッチの「母性」

女性と女性との結びつき。そのきずなをレズビアン的性愛に求めるリッチだが、それがもっと普遍化されソフト化されたのが、「母性」(motherhood)という概念である。リッチの「レズビアン的存在」が過激でなかなか受け入れられない場合でも、「母性」は理解できるだろうし、実用的な原理として実践することもできるだろう。

リッチの「母性」は、男性によってつくりあげられた従来の母性の概念と、根本的に対立する。従来の母性は「制度化された母性」と呼ばれるが、そこにおける母親は「セックスと出産のための肉体」⁴³⁾であり、嫡子を産むという「神聖な」仕事⁴⁴⁾にたずさわる人である。そして「もし〔出産や育児の過程で〕なんらかの不都合がおこると、まっさきに非難される人」⁴⁵⁾である。出産と育児のための道具。制度化された母性を、リッチはこう要約する。

Institutionalized motherhood demands of women maternal "instinct" rather than intelligence, selflessness rather than self-realization, relation to others rather than the creation of self.⁴⁶⁾

「知性」「自己の実現」「自己の創造」、これらこそリッチがかぎりなく重要視しているものだ。彼女自身が出産・育児をしていたときにも、必死に失うまいとしたものである。それらを見捨て、生きていく意味を奪いとり、女性を人間としてではなく「家の化身」⁴⁷⁾としてとらえるのが、父権制の産物たる母性なのである。

男性中心社会の基盤となるべき「家」＝「女性」が、男性の予期しない行動に出てもらっては一大事だ。だから、たとえば子どもを産まない女性は、「男性主権にたいする大きな脅威の化身とみなされてきた。家族に結びついていない女性は、結婚と出産 (pairing and bearing) という異性愛の法則に不誠実なのである。」⁴⁸⁾ その結婚と出産の法則からはみ出した、結婚しない女性や出産しない女性は、失敗者の烙印をおされる。結婚して出産する女性のほうは、これまた夫の所有物の烙印をおされる。どちらにしても、女性はいかに扱われない。「子を産むことも子がいないこともどちらも、女性をネガティブな要素にするために巧みに利用されてきた」⁴⁹⁾とリッチは指摘する。

こうした女性観を反映した「制度化された母性」と対立するのが、リッチ流

の「母性」である。それは、ひとことでいうと、産む性としての女性が出産や育児にかかわるさい、自分の肉体を自分でコントロールする権利と責任をいう。肉体にたいする権利は最高の権利だ。なにしろ肉体はリッチにとって、「根本的な問題」⁵⁰⁾ ととらえられているのだから。子を産む、産まないという決定権は、「母性」のなかに含まれる。しかし、リッチの「母性」は出産にかかわる用語だけでおわってはいない。意味がもっと拡大されて、子どもがない女性にも「母性」という語が用いられる。ちょうど、レズビアンという言葉がそうであったように、リッチ独特の定義が与えられるのである。「母性」は、女性が自己実現・自己創造を追求する主体性をもったとき、その過程で同じように自己創造に努める人にたいしてそそぐ愛情やいつくしみをさす言葉となる。出産に関係なく、また子のある／なしに関係ないのだ。

まず、出産に関係あるほうの「母性」をみてみよう。その「母性」の根本にあるのは、父権制社会のなかで男性の支配や管理にゆだねられてきた女性の肉体を、女性が積極的に自分のものとして取りもどしコントロールしていこうとする意欲である。このあたらしい「母性」の主張にリッチ自身がめざめたのは、彼女の三度にわたる出産の経験だったことが、『女から生まれて』のなかでじっくりと語られる。⁵¹⁾ 夫や義理の両親が望むままに、妊娠・出産・育児という母親のお決まりの仕事のくり返しに明け暮れるリッチ。自分の時間が無い、詩が書けないとあせりながら、それでも自分の肉体にたいする主権をもつことができずに、彼女は悩み、いらだち、怒りをいさぐ。そして三度目の出産と時を前後して、リッチはとうとう自己にたいする主権を取得するにいたる。主権の実践は、三度目の出産の直後に不妊手術をうけるというかたちをとる。やがてそれは、夫のもとを去るというかたちにもなってあらわれる。

では出産のときだけでなく、女性の人生の全域にわたって行使されなければならない「母性」とは、どういうものなのか。じつはこちらの「母性」のほうが、リッチにとって切実なのだ。この「母性」にリッチがこめた意味（むしろ願い）は、女性どうしの「気づかい」である。

Women, mothers or not, who feel committed to other women, are increasingly giving each other a quality of caring filled with the diffuse kinds of identification that exist between actual mothers and daughters.⁵²⁾

「母性」を論じることによって、リッチが最終的に到達したかった点は、この女性どうしの関係である。引用文からあきらかなように、リッチが女性どうしの「気づかい」をあえて「母性」と呼んだのは、女性どうしの関係が母と娘の関係にたとえられるからだ。「母性」は主体的に（父権性の歯車に組み込まれずに）生きる母が、同じように主体的に生きる娘に与えるいつくしみ。ただし、ここで現実には子ども（娘）がいるか、いないかは問題にならない。女性はほかの女性にたいして「母」となれるのであり、なるように「想像力」を働かせることが大切なのである、とリッチは述べる。⁵³⁾

こうした広義の「母性」が今後、開花していく場所は、「女性中心の大学」だとリッチは述べる。示唆的だ。大学の構想をかたちづくり決定するのが、隷属状態におかれていない主体的な女教官たちである場合、彼女たちは女学生たちにとって見習うべき先輩として存在するし、母娘関係のきずなをつくりあげることができる、とリッチは信じている。その「母性」のなかで、女学生たちは主体的な人間に教育されていく。

男性中心の大学の男教官のまわりの女性たちが、「手段」として使われがちなのは対照的だ。女学生たちは助手とか愛人として、教官の妻たちは秘書とかタイピストとして、無料で使われる。⁵⁴⁾ 多数の男性たちの間隙に落ち込むかわりか、女性たちは散々に点在し、女性どうしの団結ははばまれる。そうした大学のすがたを変えて、女性どうしの連帯を軸にしていくことは、「女性がもういちど自分自身を所有する」ことであり、「人間を定義しなおす」試みである、とリッチは強調する。

Consciously woman-centered universities—in which women shape the philosophy and the decision making though men may choose to study and teach there—may evolve from existing institutions. Whatever the forms it may take, the process of women's repossession of ourselves is irreversible. Within and without academe, the rise in women's expectations has gone far beyond the middle class and has released an incalculable new energy—not merely for changing institutions but for human redefinition; not merely for equal rights but for a new kind of being.⁵⁵⁾

この女性中心の大学の構想には、「男性たちは望むなら〔その大学で〕学び教えることができる」とあるように、男性たちの参加がみとめられている。文

章が書かれたのは1973-74年、リッチがまだ男性に期待をつないでいたときだ。1978年以降のリッチなら、この一節を挿入しただろうか。

リッチのフェミニスト批評は、男性をインヴィジブルな存在にしなが、女性どうしを強く、さらに強く結びつけようとする。女性どうしの強い結びつきの基盤をレズビアンに、リッチ流の「母性」におくことによって。そして女性が自分の肉体を取りもどし、自分の主人となることをめざすのである。リッチの議論において、男性の位置は空洞のままになっている。男性とフェミニズムの関係については、リッチにかぎらずわたしたちがみな、これから考察していかなければならない。

注

- 1) Adrienne Rich, *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1979-1985* (New York: W. W. Norton, 1986), p. 184,
- 2) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 95,
- 3) *Blood, Bread, and Poetry* p. 90.
- 4) Gerald Graff, "Feminist Criticism in the University: An Interview with Sandra M. Gilbert" in *Criticism in the University*, ed. Gerald Graff and Reginald Gibbons (Evanston: Northwestern University Press, 1985), pp. 111-113.
- 5) Rich, *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (10th Anniversary Edition; New York: W. W. Norton, 1986), p. 15.
- 6) Rich, "Notes for a Magazine," *Sinister Wisdom*, 1981, 17, 6.
- 7) Alexander Theroux, "Reading the Poverty of Rich" in *Reading Adrienne Rich: Reviews and Re-Visions, 1951-81*, ed. Jane Roberta Cooper (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1984), p. 304.
- 8) そのへんの事情は, Kathleen Barry, "Reviewing Reviews: *Of Woman Born*" in *Reading Adrienne Rich* を参照。とくに p. 300.
- 9) Susan Stanford Friedman, "Post/Poststructuralist Feminist Criticism: The Politics of Recuperation and Negotiation," *New Literary History*, 1991, 22: 2, 475.
- 10) たとえば、望ましい主体(subject)のとらえかたを、ポスト構造主義と文化的フェミニズム(非ポスト構造主義)の両方から引き出した論文に、Linda Alcoff, "Cultural Feminism Versus Post-Structuralism: The Identity Crisis in Feminist Theory," *Signs*, 1988, 13: 3, 405-436がある。ポスト構造主義が提示した歴史的、社会的、文化的ディスコースのびっしり書き込まれた主体(いいかえれば個人の動機や意図の度外視された主体)を、文化的フェミニズムがこだわる女性としての自己(ポスト構造主義的用語にいいかえれば、ジェンダー化された主体となる)として解釈しなおすことをめざしている。
- 11) Paul B. Armstrong, "Historicizing History: The Case for Theory," *Genre*, 1989, 22: 4, 401.

- 12) ニューヒストリシズムの生みの親としては、ミッシェル・フーコー、ポスト構造主義、ポストモダニズム、新左翼、文化的唯物主義などが一般にあげられるが、フェミニズムがあげられることはほとんどない。そんななかでフェミニズムをニューヒストリシズムの「母なるルーツ」としたのは、Judith Lowder Newton, "History as Usual? Feminism and the 'New Historicism'" in *The New Historicism*, ed. H. Aram Veeser (New York: Routledge, 1989), pp. 152-167 である。フェミニズムは「女性をヴィシブルにし女性を<歴史>に書き入れることによって、伝統的で男性的で<客観的な><歴史>に挑戦しよう」としたり、「新しい女性の歴史」を構築しようとしたのだから、すでにニューヒストリシズムの手法を先取りし実践例となっている、という主旨である。
- 13) Rich, "Toward a More Feminist Criticism" *Blood, Bread, and Poetry*, p. 94.
- 14) Rich, "Notes toward a Politics of Location" in *Blood, Bread, and Poetry*, p. 215.
- 15) ユダヤ人を対象にした講演 "If Not with Others, How?" (New Jewish Agenda National Convention, Ann Arbor, Michigan, July 1985) のなかで、ユダヤ人のリッチはごくあたりまえのことだが、自分をそう呼んでいる (*Blood, Bread, and Poetry*, p. 202)。ただし "Jews, like women" (p. 202) というように、リッチの思考のなかでユダヤ人は女性と重なり合う。彼女にとっての「ユダヤ人」と「女性」は、ともに西洋社会のなかで、「他者として」欄外に追いやられた同類である (pp. 202-203)。それがゆえに、ユダヤ人は女性と同じく「ポテンシャルをもった」(p. 209) 重要な存在なのである。
- 16) Rich, "Invisibility in Academe" in *Blood, Bread, and Poetry*, p. 199.
- 17) たとえば "Women and Honor: Some Notes on Lying"; "The Meaning of Our Love for Women Is What We Have Constantly to Expand"; Claiming an Education"; "Taking Women Students Seriously"; "Motherhood: The Contemporary Emergency and the Quantum Leap" (以上は Rich, *On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose 1966-1978* [New York: W. W. Norton, 1979] 収録); "What Does a Woman Need to Know?"; "The Soul of a Women's Collage"; "If Not with Others, How?"; "Notes toward a Politics of Location" (以上は Rich, *Blood, Bread, and Poetry* 収録)。
- 18) Stephen Heath, "Male Feminism" in *Men in Feminism*, ed. Alice Jardine and Paul Smith (New York: Methuen, 1987), p. 1.
- 19) Janet Todd, *Feminist Literary History: A Defence* (Oxford: Polity Press, 1988), p. 119.
- 20) Heath, "Male Feminism," p. 1.
- 21) Rich, "The Antifeminist Woman" in *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 71.
- 22) Rich, *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 69.
- 23) Rich, "Introduction" in *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 18.
- 24) "I disagree with myself in this book, and I find in myself both severe and tender feelings toward the women I have been, whose thoughts I find here." Rich, *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 18.
- 25) Rich, *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 108.

- 26) Rich, *Of Woman Born*, p. 211.
- 27) Rich, "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence" in *Blood, Bread, and Poetry*, p. 40.
- 28) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 50.
- 29) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 27.
- 30) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 51.
- 31) *Blood, Bread, and Poetry*, pp. 73-74.
- 32) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 51.
- 33) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 51.
- 34) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 51; p. 73.
- 35) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 51.
- 36) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 74.
- 37) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 65.
- 38) *Blood, Bread, and Poetry*, pp. 59-60.
- 39) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 23.
- 40) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 24.
- 41) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 72.
- 42) *Blood, Bread, and Poetry*, p. 67.
- 43) Rich, *Of Woman Born*, p. 41.
- 44) *Of Woman Born* の 2 章 "The 'Sacred Calling'" 参照。
- 45) *Of Woman Born*, p. 222.
- 46) *Of Woman Born*, p. 42.
- 47) *Of Woman Born*, p. 42.
- 48) *Of Woman Born*, p. 252.
- 49) *Of Woman Born*, p. 249.
- 50) *Of Woman Born*, p. 284.
- 51) *Of Woman Born* の 1 章 "Anger and Tenderness" 参照。
- 52) *Of Woman Born*, p. 253.
- 53) *Of Woman Born*, p. 251.
- 54) Rich, *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 137; p. 139.
- 55) *On Lies, Secrets, and Silence*, p. 155.